姫島周辺に沈む焼物

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24724

姫島周辺に沈む焼物

九千房百合

昨夏（2009 年）、日本海域水中考古学会の能登半島調査において、私は地元である珠洲市三崎町寺家の聞き取り調査と文書資料等からの調査を担当させていただいた。以下はその概要である。

能登半島の最北端、禄綱崎から少し南の遭崎から高波の宿崎までの沖合を、古来「三崎の本潤」と言い、海上交通の要衝として多くの船が行き来し、また沖がかりして風待ちをしていた。ちょうど内海と外海の境界にあり、東風（アイの風）に乗れば輪島へも飯田方面へも行け、北風（タバカチ）なら富山・新潟へ、西風（シカタの風）であれば輪島からも小木からも来られ、と、1 つの風で色々な方向へ馳せて行くことができるので、「三崎の八方ばせ」ともいった。

天保四年（1833 年）の「能登國鈴三崎絵図」には、三崎の塩津港の様子が描かれているが、多くの船が停泊していることが見てとれる。本当にこんなにいたのか、この絵図は誇張ではないか、という疑問がわいたが、塩津の港に満潮山専念寺という真宗寺院があり、そこに残されていた古文書には、条件付きとはいえ年間四千艘という数字も見え、別の記録には、文政四年（1821 年）六月、下りの風（南風）でいづれへも馳せられず大小四百艘ばかりが三崎の浦に滞船していた、とあるので、誇張とばかりも言えない。諸廻船は、この専念寺にある日照りでも乾かない井戸から、腐らないという水を補給して行った、と言い伝えられている。この「三崎の本潤」中最大の難所が、遭崎の沖約 900m に頭を出している姫島岩礁である。姫島、神島、鬼島とそれに続く暗礁で、絵図では「イヒクリ」「カメクリ」となっている。現在は姫島に灯台が建てられ、神島は「ナカノシマ」、鬼島は「オキノシマ」と呼び名が変わったが、「イヒクリ」は「エイグリ」、「カメクリ」は「ガメグリ」と、音に昔日の面影を残している。塩津港への出入りの際に、また時化のために、多くの船がここに座礁、難破してきた。昭和 20 年代に灯台が建てられるまでは、漁船その他を問わず、しょっちゅうだった、と聞いている。近世に目を向けるならば、古文書ではっきり記載があるもので姫島に沈んだ船は 2 艘、文化十二年（1815 年）7 人乗りの船が三崎浦で難風にあい、姫島に打ち寄せ、破船、これは専念寺文書に記録されており、助けを呼ぶ声が聞こえていたけれども波風でどうにもできず、ついに助けることが叶わなかった、という悲惨な事故であった。もう一つは弘化三年（1846 年）加州宮腰銭屋喜太郎船が姫島にて難船、寺家村より手船・人足を出した、とある。ほか年代不詳で寺家村が関わるのが 2 件ある。ただ、記録に残っていない難破船も多いことを窺わせる史料として、宝暦六年（1756 年）、「金剛崎焼火常燈願い」がある。この内容は、諸廻船の助けとして山伏山に常燈が建てられているが、廻船が姫島の磯を渡海するので、（姫島の沖を通ると、大出し風になって吹き落とされるため）山伏山の常燈が山の陰になって見えず、姫島、神島、鬼島の沈みくりに馳せあて破損し、荷物まで捨てて難儀する。そこで遭崎の北にある金剛崎に常夜燈を設けて欲しい、という願い状である。文政二年（1819 年）には、専念寺の住職である順諦師が、「三崎浦潤普請方願書」で、沖懸かり中、大波で難船するのと姫島に打ち寄せられ破船するのを防ぐために港を造る計画を願い出ている。最終的に天保四年（1833 年）、須々神社の大宮司猿女友能氏が諸人の寄付を募って遭崎の天ヶ端に常夜燈明をたき、鳥居前の石灯籠に常夜燈をささげて、三崎の本潤がかり船の目当てとし

注）猿女真信氏所蔵。

能登国鈴三崎絵図　（泉雅博「能州三崎浦専念寺文書からの海域史」より）

図 1 「能登國鈴三崎絵図」

図２　姫島の海岸

た。また、姫島の沈み瀬には竹を束ねたものを澪つくしとして建て、絵図にして諸廻船に配布した。それが「能登國鈴三崎絵図」である。

この姫島周辺には何が沈んでいるか。まず船体自体。聞き取り調査の中で、地元の方々は昭和 30 年代まで、戦時中に沈没した鉄船が海中に見えていたと言うが、木造船が残存しているかはなんとも言い難い。姫島周辺で岩礁にあたって沈没したのであれば、当然船体は破損が著しいと思われる。一方で、鉄製の錨。これは比較的最近､サザエ漁の網にひっかかったものが 2 点、引き揚げられている。1 つは姫島の北側で、ナカグリと呼ばれる場所、もう 1 つは南側でコスケグリと呼ばれる場所から引き揚げられた。大きさは多少違うが、両者とも重量 36kg、海中で腐食する前はおよそ十貫（40kg）あったと思われる。現在、2 点ともお借りしてきて、家の前に並べてあり、保存処理などどうすべきか、少々頭を悩ましているところである。

図３　姫島引き揚げの鉄錨２点

確実に沈んでいる物としては、時代はやや下って明治期に、大量の伊万里焼を積んだまま、姫島で沈没した船がある。地元の言い伝えをまとめると、現在「ランプの宿」を経営しておられる刀祢さんのご先祖が、難破した船を船荷ごと買い取り、人を雇って引き上げさせようとしたものの次第に財産が底をつき、まだかなりの量を残したまま引き揚げを断念した、ということのようだ。明治何年に、なんと言う船が沈没したのかというところは不明である。

昨年 7 月、戦時中に寺家沖で沈没した戦艦を探索中のダイバーが沖の島の水深 13 ～ 17m で大量の陶磁器片を発見した。現時点ではなんとも言えないが、今後調査が進めば、次第に明らかになるであろうと期待している。

今回の調査の一環で、聞き取りと併せて多くの伝世品―それも江戸時代のもの―を見せていただいた。我が家にも、ないと思っていたが、一枚納屋の奥から出てきた。寺家にはけっこうあるようだが、どこのお宅を訪ねても、誰がどうやって手に入れたかは分からないと言われた。由来は分からずとも、それらがかつて盛んであった海上交易の証であることに変わりはない。ぜひ地域の宝として、後世に伝えていきたい、また、伝えていただきたい、と思う。

（以上公開フォーラム発表原稿一部改変）

文献

坂下喜久次「三崎の歴史」1988 年

泉雅博「能州三崎浦専念寺文書からの海域史」『フォーラム』18 号､跡見学園女子大学文化学会編 2000 年（なお、この論文は 2010 年 2 月 1 日に出版した『海と山の近世史』吉川弘文館　に再録しました。）

(qjfcc228@yahoo.co.jp)